

# 秦長城建設とその歴史的背景

## はじめに

紀元前三二一（始皇二六）年、秦始皇帝は東方の戦国諸国を統合し、車軌・文字・度量衡の諸制度を統一した。このときいわゆる万里の長城を築いて、北方の遊牧民族の侵入を防いだことは周知の事実と見られている。すなわち『史記』巻八八蒙恬列伝にはこのことを概括して

秦已に天下を并すや、乃ち蒙恬をして三十万の兵を將いしめ、北のかた戎狄を逐い、河南を収めて長城を築く。地形に因りて用て險塞を制し、臨洮より起こし遼東に至るまで延袤万余里。

と記述している。秦が天下を統合した際に、將軍蒙恬を河南（河套オルドス）に派遣して、西は臨洮から東は遼東まで一万余里（約五千キロ）の長城を築かせ、北方の戎狄匈奴の侵略に備えたのである。

秦の後も、前漢、後漢、北魏、東魏、北周、北齊、隋、金、明の各王朝が長城を建設したから、長城はともかくも始皇帝の偉業として後世まで語り継がれることになった。

## 鶴間和幸

しかし始皇帝は中国史上初めて統一政権を樹立したという功績によって、ときに開明君主として賞賛され、ときに残酷な為政者として酷評されてきた。長城建設にまつわる孟姜女の伝説も、秦代のものではなく、後世の人々が始皇帝政治の苛酷な姿を語り伝えたものにはかならない。従来、長城に関する文献史料は、司馬遷以来、後世の人々の始皇帝に対する粉飾や偏見に満ちている。そしてまた始皇帝の統一事業として造られた万里の長城の実態もはっきりしない。一般に歴史地図に示された秦の統一時の長城とは、あるものは戦国時代の秦、趙、燕の各北辺の長城をそのまま横に並べ連ねたものにして区別し、戦国秦の長城は陝西北部の黄土高原とオルドス平原を斜めに横切り、統一秦の長城の方は北の黄河に沿って臨洮から遼東まで一直線として示している。実際の長城の遺跡を根拠にしている部分もあるが、多くは『史記』のわずかな記述から憶測したにすぎない。

われわれは臨洮から遼東にいたる万里の長城が統一秦の長城であ

るとの前提から出発してしまいがちであるが、その実態にはあまりに不明な点が多い。問題点を列挙してみれば、燕、趙、秦戦国各国の北辺の長城と統一秦の長城との関係はどのようなものであるのか、また統一秦の西端、東端とされる臨洮、遼東長城の位置はどこにあるのか、さらに河南オルドス占領後に黄河沿岸に造ったという統一秦の城塞の長城の状況はどうであるのか、戦国魏、中山、楚、斉諸国が内地に造った長城が統一後にどのように廃棄されたのか、さらには秦長城を修復して拡大したという前漢長城など後世の長城との重複関係はどうであるのかなど、いまだ解明されていない。

本論は、戦国秦と統一秦の長城建設の実態を、陝西省、寧夏回族自治区で実施した調査の成果をふまえながら、既存史料の読み直しをすることによって見極めていこうとするものである。秦長城に関する文献史料は絶対的に少ないけれども、近年、戦国や統一秦の時代の長城の遺跡が部分的にも各地で調査され、研究も活発化している<sup>(3)</sup>。また後世の孟姜女伝説の舞台、明代の山海関長城付近でも、秦代の大規模な離宮遺跡が発掘されるなど、新たな角度から秦長城建設の歴史的背景を見直していく契機が与えられているといえる。

### 一 戦国秦の長城建設と故秦の形成

戦国秦の領域は秦自ら「故秦」(故<sup>もと</sup>の秦)と呼び、『商君書』徠民、睡虎地秦墓竹簡「秦律雜抄」、『漢書』地理志、地形から見れば渭水盆地の平野部と黄土高原の山間部からなる。当時の行政区分で見れば、内史(前漢の京兆尹・左馮翊・右扶風)とその西北辺の隴西、北地、上の三郡の区域である(後掲図参照)。秦が「新民」(同『商

君書)と呼んだ東方六国を支配したあとも、「故秦」の地は北方の「河南」オルドス平原と、そのさらに北方の黄河中流域の河岸平原部「九原」へと拡大した。「故秦」を「秦中」(秦の中心部)、統一後に獲得した黄河流域の豊かな土地を「新秦中」(新たな秦中)と叫んだのは、秦自身ではなくつぎの漢王朝の時代であった(『漢書』食貨志下)。秦帝国を継承した前漢王朝は、やはり秦中すなわち関中に基盤を置き、匈奴に占領された河南、新秦中を武帝のときにふたたび奪還するという、秦の西北支配と同じ状況を繰り返したからである。

一般に秦の故地は秦帝国形成後になると、とくに帝国の中央として固定的に考えられがちである。たしかに秦帝国の支配構造の中枢地区としての側面はあるが、同時に行政的な畿内の中央も、故秦の形成から、河南、新秦中への地域的拡大として追って見れば、東方六国とともに一つの地域として相対化させることができる。蒙恬が秦の將軍として東方六国の戦争に功績をあげた後に、京師(首都圏)をつかさどる内史となって北方の匈奴との戦争に矛先を変えていったのは象徴的であった。内史の官職として首都の北方に連なるオルドス草原へ侵略していったのは、内史の管轄を囲む後背地を拡大していったことを意味した。内史の区域は、旧東方六国を治める基盤であるとともに、やがて北方への帝国の領土の拡大の拠点となり、戦争は続けられていった。

もともと戦国縦横家たちは、秦の領域が渭水盆地の四塞の地にあることを、東方六国に対する軍事的優位性として強調した。しかしその閉鎖性は、東方六国の領域の開放性と対比したうえで強調され

たものであり、だからといって秦の故地が常に閉鎖的であったということにはならず、秦の基盤領域は実際にはむしろ絶えず外に拡大していったといえる。四塞の地関中を「東は函谷、南は武関、西は散関、北は蕭関」と解釈するのは後世の晋の徐広の解釈であり、「東は函関自り西は隴関に至り、二関の間、これを関中と謂う」とするもの、やはり晋の潘岳『関中記』の説明である。戦国秦から統一秦への時代は、渭水盆地（平原）と黄土高原（峡谷と小盆地「原」、そしてオルドス草原（平原）と黄河中流域の沿岸平原の四つの異なる地形の地を舞合としていたので、関所に囲まれきつちりと管理された四塞という解釈は後世のものであって、戦国時期の故秦の四塞とは、たしかに渭水平原という狭い範囲のとくに東方への出入り口函谷関は厳しく管理されたが、西北部には開かれたものであったといえる。そもそも故秦自体も、黄土高原の小盆地、峡谷の地を拠点にしていた秦が、東西に開けた渭水盆地に展開することによって形成されたものであった。

こうしてみると戦国秦の長城と統一秦の長城の関係も、故秦から河南、新秦中への拡張の歴史を軸に整理することができる。そうすると、臨洮から遼東に至る万里の長城を、始皇二六年の完成された統一事業として見るわけにはいかなくなる。まずは戦国秦の長城がどのような地に建築されたのかを追っていく必要がある。

故秦とその周辺の四つの区域は、人々の居住生活の違いからみれば、黄土高原の山間峡谷の牧畜と農耕の民、渭水流域の平原農耕の民、オルドス平原の草原の民、黄河中流域の灌漑農耕の民の地である。四つの地域は、いずれもかつて等しく黄土の砂塵の堆積を受け

た地であったが、水源、岩盤の地形、黄砂の風化、乾燥度の程度によって相異なる様相を呈する。秦はまず六盤山系の黄土高原から出発し、渭水盆地の平原に下り、その地力を確保したうえで東方諸国を破り、さらに戻ってオルドス平原、黄河流域の平地を占領していったといえる。その展開が秦という国家の性格を大きく左右していった。

『史記』秦本紀や、司馬遷の依拠した秦の史書『秦記』によれば、秦の先祖は、まず非子以来犬丘（一説に槐里、一説に隴西西県）や汧水・渭水間で馬の放牧をしていた山間峡谷の牧畜の民であったが、やがて秦という土地を周王から授けられ、周王との関係をもちながら西戎の覇者となっていく。「秦」とは曰でつく穀物の豊かな地を意味し、のちの天水隴西の秦亭、秦谷に当たる（『漢書』地理志）。渭水盆地西端の犬丘や汧水・渭水間から見れば、秦の地は六盤山系を超えた極西の地であった。そしてその後、まさにこの西方の極地も意味する西垂という地に移り、ここには秦の諸侯の宮殿と墓地が置かれ、襄公（前七八〇—七六九）や文公（前七六九—七二〇）は西垂あるいは西山と呼ばれた地に埋葬されていると記録されている。西垂とは、漢代の隴西郡西県といわれ、秦地の南、六盤山系の西、渭水源流の地である。秦国の故地の形成は六盤山を挟んだ両端の地から始まった。

六盤山系は古来隴山とも呼ばれ、周辺の高原峡谷と異なり、南北二百キロ以上、東西三十一六十キロ、二千五百メートル級の山岳が続き、森林の樹木も多く、涇水などの諸河川の水源地となっており、豊かな牧草地の広がる山麓も広がっている。甘肅省天水県放馬灘で

発見された戦国秦墓は、隴西西垂地区の経済的、軍事的重要性を語ってくれた。都を渭水平原の西端の雍城に移した後も、ここは対西方政策の重要な拠点となっていた。近年甘肅省礼県大堡山でも車馬坑をもった大型の秦墓が発見されている。故秦西端のこの地は、戦国、統一時を通じて重要であり、始皇帝陵から出土した陶文にも犬亭・西の文字があり、西方の犬丘や西県で焼いた瓦が陵墓建築に調達されている<sup>10)</sup>。

さてこのような背景を押さえたうえで、戦国秦の長城の建設の起因について考えてみると、『史記』匈奴列伝の一つの記述から出発しなければならぬ(表1参照)。すなわち昭襄王の時代に、義渠の戎王が宣太后(一前二六五、武王の皇后、昭襄王の母、楚人、芷陽に埋葬)と私通して二子をもうける事件が起こったときに、宣太后は義渠戎王を甘泉で謀殺し、義渠を討伐したことが長城建設のきっかけになっているという。義渠はすでに秦の恵文王の時代前三一四年に二十五の城を奪われるほどの、城郭をもっていた。二十五とは黄土高原に点在する小盆地の各集落の数であり、これらを押さええていたのである。もともと隴西、北地の黄土高原の地は、西戎と総称された部族が限られた盆地に散居した地であった。周ももともと涇水流域の盆地(現在の彬県一带)に豳国を建てたが、古公亶父のときに渭水盆地の岐山へ下っていった。隴西には緜諸、緄戎、翟、獯といった戎、岐山、梁山、涇水、漆水の北には義渠、大荔、烏氏、胸衍といった戎が、溪谷に君長のもとに牧畜の民として散居していた(匈奴列伝)。始皇帝から封君として優遇された烏氏侯が、牛馬の放牧で財をなし、家畜の数は放牧していた谷の数で量ったという

故事は『史記』貨殖列伝、この地の民が限られた谷間の斜面に放牧して生活していた様子を語ってくれる。秦も本来は西戎の一部族であったが、西戎牧畜の民の覇者になっていたのである。

西北の秦長城の役割は、一方でこうした峡谷に分散した牧畜の部族を囲い込むと同時に、黄土高原の北に広がる草原の遊牧の民の侵入を防ぐというものであった。昭襄王のときに北辺三郡隴西・北地・上郡に築いた長城のうち、臨洮を起点にした隴西部分は、まさに秦のもっとも古い故地六盤山系西の牧畜の民を、西北草原の遊牧の民から守るものであった。孝公のときにすでに実施されていた商鞅変法も、商鞅自身秦の習俗「戎翟の教」を改めたといっているように(『史記』卷六八商君列伝、実は故秦の峡谷に居住していた牧畜の民の習俗を盆地平原の農耕の民の習俗にあわせて一律化しようとした側面が多分にあった。牧畜の民の父子兄弟の同居の習俗を禁じ、黄土高原の峡谷に点在する小集落(「小郷邑聚」)を集めて三十一ないしは四十一の県を設置したのも、また耕地の畦道(阡陌)を画定して境界を明らかにしたのも、さらに度量衡を画一化したのも、盆地の農耕民の価値観を山間の牧畜民にも押しつけた側面がうかがえる。西戎諸部族を統一し、中原の戦国国家と対抗していくために必要な改革であった。戦国長城による国境領域の画定は、たんに対外的な効果を強調するだけでなく、戦国国家形成に果たした役割をもっと注視してよいであろう。

時代が下って始皇帝が統一の翌年の前二二〇年に行った第一回目の巡行は、二回目以降の旧六国の地の巡行とは異なって咸陽から西方の秦の故地を巡るものであった。統一後の行動ではあったが、戦

表1 戦国長城の記事

	秦	趙	燕	韓	魏	楚	齊
戦国長城記事	○簡公七(前408)年, 塹洛(六国年表) ○秦昭王時(306-251), 義渠戎王與宣太后乱, 有二子。宣太后許而殺義渠戎王於甘泉, 遂起兵伐殘義渠。於是秦有隴西・北地・上郡, 築長城以拒胡。(匈奴列伝)	○成公六(369)年, 中山築長城。(趙世家) ○(肅侯)十七(333)年…築長城。(趙世家) ○趙武靈王(325-299)亦變俗胡服習騎射, 北破林胡・樓煩, 築長城, 自代並陰山下, 至高闕為塞。而置雲中・雁門・代郡。(匈奴列伝)	○燕有賢將秦開, 為質於胡, 胡甚之, 婦而襲破走東胡, 東胡卻千余里。…燕亦築長城, 自造陽至襄平, 置上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡以拒胡。(匈奴列伝)	○河南郡卷陽「有長城, 經陽武到密」(『後漢書』郡国志) (『日知録』は韓の長城とするが魏のものか)	○(蘇秦)又説魏襄王曰「大王之地, …西有長城之界, …」(蘇秦列伝) ○魏築長城, 自鄭浜洛以北, 有上郡。(秦本紀) ○惠成王十二(359)年, 龍賈帥師築長城于西邊(竹書紀年) ○惠王十九(352)年, 築長城塞固陽(魏世家・六国年表)	○(齊・魏・韓)共攻楚方城(秦本紀)  ○南陽郡葉縣「有長山曰方城」(『後漢書』郡国志)	○燕王曰, 「吾聞齊有清濟・滹河可以為固, 長城・鉅防足以為塞, 誠有之乎。」(蘇代列伝) ○(趙成公)七年(368)侵齊至長城。(趙世家) ○梁惠王二十(351)年, 齊閔王築防以為長城。(正義引竹書紀年) ○濟北国盧縣「有長城至東海」(『後漢書』郡国志)
戦国長城遺跡	【東】○陝西省白水・蒲城・澄城・大荔・合陽 【西北】○甘肅省臨洮・定西・平涼・鎮原・彭陽・慶陽 ○寧夏回族自治区固原・陝西省吳旗・靖邊・橫山・榆林	【北】○内蒙古自治区呼和浩特市・包頭・興和 ○河北省張家口・蔚県	【北】内蒙古自治区昭烏達盟河北省围場遼寧省建平		【西】○陝西省澄城・黄龍・華陰・大荔 【東】○河南省原陽・鄭州	○陝西省旬陽	
統一長城と内地長城の廃棄	因辺山險壘谿谷可繕者治之, 起臨洮至遼東万余里。(匈奴列伝) 築長城, 因地形, 用制險塞, 起臨洮至遼東, 延袤万余里。(蒙恬列伝)			(始皇)三十二年…壞城郭, 決通隄防。(秦始皇本紀) 墮壞城郭, 決通川防, 夷去險阻。(碣石刻石)			
統一長城の遺跡		【旧趙】 ○内蒙古自治区浪山・烏拉特前旗・固陽・武川・卓資・集寧 ○河北省懷安・張家口・围場	【旧燕】 ○遼寧省赤峰・敖漢旗・奈曼旗・阜新				

国秦の故地の状況をよく物語ってくれるのでここでふれておきたい。『史記』秦始皇本紀には実に簡単に「二十七年、始皇隴西、北地を巡り、鶏頭山に出、回中を過ぐ」と記述するだけであり、おそろしくこれは戦国秦の史記『秦記』に基づいた記事であろう。ここでは、巡行の目的地が秦の北辺三郡のうちもともと魏の領有していた上郡を除く（上郡へは第四回巡行で通過する）隴西、北地の西北二郡にあったことを前句で述べ、つぎにその途上鶏頭山と回中を通過したことと言及している。咸陽からの経路は推測するほかはないが、まず隴西と北地郡の位置を黄土高原の地形からおさえておく必要がある（後掲図参照）。その地は隴西郡が渭水、北地郡は涇水という秦の二大河川流域上にあり、両郡相互間は戦国秦の長城によって横に直結しているが、交通路は六盤山系で遮断されている。したがって首都咸陽と、上郡を含めた北辺三郡とは、それぞれ放射状に延びた三本の道路で結ばれていた。河川流域沿いの隴西、北地二郡は流域段丘の狭隘な自然道を利用できるが、上郡の場合は黄土高原の河川沿岸や山稜の道路を選ぶなど迂回しなければならなかった。

「隴西、北地を巡る」巡行が、その通りの順序であるとすれば、まず咸陽を出発して渭水をひたすら六盤山系へと廻り、隴西郡に入ることになる。この地はさきの秦と呼ばれた秦の旧地であり、このとき春秋初期の秦の諸侯の墓葬地西垂などの地を巡ったのであろう。隴西から北地への経路は、六盤山系の西端を北上し、涇水源流沿いの山道通って山越えし、（鶏頭山に登ったのではなく）「鶏頭山に出た」のであろう。武帝が最初に巡行したときにも、隴山を越えてから北上して蕭関に出、数万騎を率いて新秦中で狩をし辺境の兵士

を閲兵した（『史記』巻三十平準書、本紀）。鶏頭山からは六盤山の東側に沿って南下し、「回中を過ぎて」涇水沿いに下って雍城を通って咸陽まで戻った。回中には後の前漢文帝のときに匈奴に焼かれた宮殿があった。六盤山系の東斜面付近の高地の避暑宮であっただろう。蕭関―回中―雍城という経路は、匈奴の侵入路でもあったし、前漢武帝は元封四年に逆コースで「回中道」を通って北上している。回中道とは、六盤山系から涇水に出る迂回する山道であろう。要するに始皇帝は六盤山系の東西という秦の故地の山川を訪れたのであり、渭水に沿ってまず六盤山系を西に越え、つぎに北の鶏頭山で再び東に山越えして戻ったのであった。隴西郡の西端狄道から東は北地郡東端義渠道まで東西に大きく移動し、そしてまたその中間に位置する鶏頭山、回中にまで戻るといふ経路を推定しても、山間峡谷の多い黄土高原では選択しがたい。

寧夏回族自治区の固原では、戦国秦の長城の遺跡を調査した。固原は東西二十キロ、南北二十五キロのかなり広大な黄土高原の峡谷のなかの盆地である。西と南は六盤山系の山並み、西北方向は清水河の河道によって開けている。長城遺跡はいくつか残っているが、固原県の北、鋪装道路で縦断され断面の露出した場所を選んで調査した。固原の北には外城、内城二重の長城が西南から東北に走っているの、その内城部分に当たる。道路で切られた断崖部分の版築層の厚さは、九センチから十二センチの範囲であった。西北から東北に延びる長城は、漢代や北宋代にも重ねて修築されており、六盤山系東に位置する固原（関中の北関蕭関は南にあり）の重要性を認識できた。

戦国の秦の長城は西南から東北へ斜めに築かれた。この方向は自然の地形から見ても一定の意味があるラインであり、渭水や黄河の支流と直角に交差する分水嶺に位置する。そして黄土高原とオルドス草原の分界になっているように、年間降雨量四百ミリの線とはほぼ重なっている。戦国秦の西北長城が黄土高原の峡谷に点在する西戎部族を自己の領域に組み込み、オルドス高原の以北の草原の遊牧の民の南下を防ぐものであったのに対して、洛水に沿って築かれたもう一つの長城は西北長城建設よりも前に、対魏戦略上の軍事施設として造営されていた。洛水は呉旗県西北から流れ、渭水に注ぐ。

『史記』秦本紀によれば、秦の簡公七年（前四〇八）年「洛に塹し重泉に城く」、六国年表にも同年「（秦）洛に塹し重泉に城く」とあり、戦国秦は洛水沿いに「塹」という形で軍事施設を作ったことがわかる。河川沿いに防壁の長城を作る形式は、すでに厲共公十六（前四六一）年に「河旁に塹す」（秦本紀）、靈公八（前四一七）年「河瀕に城塹す」（六国年表）という前例があるから、河川を国境とした場合に、「長城」とはいいっていないが、河川沿いに防衛施設を造営した。魏の側からも同時に魏文侯十七（前四〇八）年「西のかた秦を攻めて鄭に至りて還る。雒陰、合陽に築く」（魏世家）と対抗した。そしてさらに、「魏は長城を築き、鄭自り洛に浜して以て北し、上郡有り」（『史記』卷五秦本紀）とあるように、洛水に沿って上郡まで長城を連ねた。魏恵王十九（前三五二）年には「長城を築き、固陽を塞ぐ」（魏世家、六国年表）、また『竹書紀年』に「梁恵成王十二（前三五九）年、龍賈師を率いて長城を西辺に築く」（『水経注』濟水注）とあるから、魏の長城は渭水南から洛水に沿って北上

し、さらに上郡を越えて黄河北の固陽まで続いていたことになる。

陝西省白水県の洛水と白水が合流する田家河村と西固郷において、秦洛水長城の遺跡を実際に調査した。田家河村では烽燧と墓葬と長城に登る石城道の石量が残っている。そのすぐ南の洛水西岸の西固郷では、方山塞という石積みみの長城の遺跡が見られる。すでに史念海氏や彭曦氏が調査しているが、「洛水に塹す」という長城の形式は、地面に壕を掘ったものではなく、洛水沿岸に迫っている山麓の斜面の高地を崩して石積みみの城を築くものであった。ここでは傾斜のやや急な斜面に六段の長城が築かれ、丘陵の頂上には見晴らしのよい平台と、烽燧台の跡があった。湾曲した洛水の流れの対岸も、丘陵が接近した地形であり、対岸の魏の長城と対峙する形となっている。<sup>(13)</sup>

前三三〇年、秦が魏から河西の地を得て上郡を確保してから、この戦国秦の東長城は役割を終え（秦恵文王八、魏襄王五）、秦の東の国境はさらに東の黄河へと移っていく。そしてやがてつぎの昭襄王の時代に出てくるのがすでにふれた西北の長城であった。新たに得た上郡の地から西南方向へ長城を築くことになる。

## 二 統一秦の二つの城塞

### ——「河上の城塞」と「陽山の亭障」

司馬遷は北辺から直道を通って都長安に戻るときに、秦の蒙恬が築いた長城の城砦を見、直道を歩き、そのときの感想をつぎのように述べている。

太史公曰く、吾北辺に適き、直道自り帰り、蒙恬の秦の為に築

表2 『史記』にみえる統一秦の長城・直道関連記事の異同と整理

始皇	西暦	秦始皇本紀	六国年表	匈奴列伝	蒙恬列伝	李斯列伝	記事の整理
26	221 (紀元前・以下同)	地東至海暨朝鮮，西至臨洮・羌中南至北嶺戸，北扼河為塞，並陰山至遼東。					
32	215	始皇之碣石…刻碣石門。壞城郭，決通提防。其辭曰，…墮壞城郭，決通川防，夷去險阻。  始皇巡北辺，從上郡入。始皇乃使將軍蒙恬發兵三十萬人北擊胡，略取河南地。	帝之碣石，道上郡入。	後秦滅六国，而始皇帝使蒙恬將十萬之衆北擊胡，悉取河南地。	秦已并天下，乃蒙恬將三十萬衆北逐戎狄，取河南。	長子扶蘇以數直諫上，上使監兵上郡，蒙恬為將。	戦国内地の長城の撤去はこの年でなく26年直後、巡行上郡から戻る蒙恬オルドス占拠
33	214	A 西北斥逐匈奴。自榆中並河以東，屬之陰山，以為三十四県，城河上為塞。 B 又使蒙恬渡河取高闕・陶山・北假中，築亭障以逐戎人。徙謫，夷之初県。	A 西北取戎為四十四県，築長城河上。  蒙恬將三十萬。	A 因河為塞，築四十四県城臨河，徙適戍以充之。	築長城，因地形，用制險塞，起臨洮至遼東，延袤万余里。  B 於是渡河，拋陽山，逶蛇而北。暴師於外十餘年，居上郡。	更為書賜長子扶蘇曰「…今扶蘇與將軍蒙恬將師數十萬以屯邊十有餘年矣。不能進而前，士卒多耗，無尺寸之。」	A 河上の城塞建設 B 蒙恬渡河し陽山に城塞建設
34	213	適治獄吏不直者，築長城及南越地	適治獄不直者築長城。				不正獄吏を長城建設にかり出す
35	212	C 除道，道九原抵雲陽，塹山煙谷，直通之。	C 為直道，道九原通甘泉。	C 而通直道，自九原至雲陽。因辺山陔塹谿谷，可繕者治之，起臨洮至遼東万余里。B 又度河拋陽山北假中。	始皇欲游天下，C 道九原，直抵甘泉，迺使蒙恬通道，自九原抵甘泉，塹山堙谷，千八百里。道未就。為秦開地益衆，北靡匈奴，A 扼河為塞，因山為固，建榆中(太史公自序)。		C 九原・雲陽間に直道建設
36	211	於是始皇卜之，卦得游徙吉。A 遷北河榆中三万家，拜爵一級。	徙民於北河榆中，耐徙三處，拜爵一級。				北河の榆中(河上の城塞)に徙民
37	210	行遂從井經抵九原。…C 行從直道至咸陽，發喪。	殺蒙恬。道九原入。	十餘年而蒙恬死，諸侯畔秦，中國擾亂，諸秦所徙適戍邊者皆復去。 於是匈奴得寬，復稍度河南與中國界於故塞。	「恬罪固當死矣。起臨洮屬之遼東，城塹万余里。此其中不能絕地脈哉，此乃恬之罪也。」		巡行(始皇帝の遺体)直道から戻る
前漢高祖	205	(高祖2) A' 繕治河上塞。(高祖本紀)					A' 匈奴河南占拠，高祖秦の河上の城塞を修築
前漢武帝				於是漢遂取河南地，築朔方。B' 復繕故秦時蒙恬所為塞，因河為固。	吾適北辺，自直道歸。B' 行觀蒙恬所為秦築長城亭障，塹山堙谷，通直道，固輕百姓力矣。(蒙恬列伝論贊)		B' 前漢武帝時蒙恬建設の城塞を修築
武帝元封元	110	行自雲陽，北歷上郡・西河・五原，出長城，北登單于台，至朔方，臨北河。(『漢書』武帝紀)					武帝，長城に出て北河に臨む

くところの長城の亭障に行きて観る。山を塹り谷を堙め直道を通ずるは、固より百姓の力を軽んずればなり。『史記』卷八八 蒙恬列伝論贊

北辺の長城の九原から南の甘泉宮に延びた千八百里の直道の建設は、とくに黄土高原まで南下すると、丘陵の稜線を平坦に崩したり、峡谷の盆地を埋めたりする困難な工事であったろうから、それは秦の民衆の力を奪うものであったという。長城建設ばかりでなく、直道という北辺へ延びる軍用の馳道の建設が人民に過酷な労働を課したという実感を得たのである。このように実際に秦の時代に作られ、漢代にも継続された長城の城塞を見た司馬遷は、『史記』秦始皇本紀、六国年表、匈奴列伝、蒙恬列伝の各編においてわずかながらも具体的な長城の記述を残している(表2参照)。

統一秦の長城に関する基本史料は、『史記』秦始皇本紀、六国年表、匈奴列伝、蒙恬列伝の四つである。秦始皇本紀と六国年表は、始皇二六年から三七年までの時期を年代順に、基本的には『秦記』に依拠して記述している。而列伝の方は、匈奴列伝はほぼ記事の年代順に、蒙恬列伝の方は蒙恬・毅兄弟の故事を中心に記述している。長城は城塞に至る道路の建設と切り離せないで、長城と直道の記事をあわせて整理してみると、史料相互間にくつかの齟齬が認められる。性格の異なる記事でもあり、一世紀前の秦の長城を記述したものであるので、やむをえない。

全国を統一して秦が長城建設に着手したのは、統一後七年も経過した前二一四(始皇三三)年のことであり、その地は秦帝国の北辺全体ではなく、オルドスの河南という局地的なものであった。まず

前年の前二一五(始皇三二)年の秦始皇本紀の記事、「秦を亡す者は胡なり」という録図書という予言書のあとに

①始皇乃ち將軍蒙恬に兵三十万人を發し、北のかた胡を撃ち河南の地を略取せしむ。

とあり、蒙恬の河南占領を契機として翌年長城建設に着手する。始皇本紀始皇三三(前二一四)年条には

②西北のかた匈奴を斥逐す。榆中自り河に並いて以て東し、之を陰山に属ね、以て三十四県と為し、河上に城き塞と為す。③又蒙恬をして河を渡り高闕、陶山、北假中を取り、亭障を築き以て戎人を逐う。謫を徙して之を初県に実たす。

ここに記述されたのは、万里に連なる長城の建造のことではない。まず蒙恬が三十万の兵を率いて北方の胡族の匈奴を攻撃して河南の地を収めたときに(①)、榆中から黄河に沿って三十四の県城を置いて北方の防衛線としたことと(②)、もう一つは河南を収めた結果黄河北を渡り、その地の国境警備のために内地から移民を送り込んだという(③)二つの事件を述べている。『史記』六国年表始皇三三年条にもそのことを簡単にまとめて、

②西北戎を取り四十四県と為し、長城を河上に築く。①③蒙恬三十万を將う。(番号は本紀の記事に対応)

と記述してある。さらに『史記』卷一一〇匈奴列伝には

①後に秦、六国を滅ぼし、而して始皇帝、蒙恬を使用して十万の衆を將いて北のかた胡を撃ち、悉く河南の地を収む。②河に因りて塞と為し、四十四県の城を築き河に臨み、適戍を徙してこれを守らしむ。④而して直道を通じ、九原自り雲陽に至る。⑤

因りて山險を辺とし谿谷を壑とし、繕う可き者はこれを治め、臨洮より起き、遼東に至るまで万余里。③又河を度り、陽山の北假中に拠る。

と記し、やや込み入った記事となっている。まず始皇三三年の蒙恬の河南出兵のことを述べ①、つぎに始皇三三年の黄河に沿って四十四の県城を連ねた城塞に言及し②、最後に渡河の城塞建設にふれるが③、その間に始皇三五年の直道建設と④、さらに臨洮から遼東までの万里の長城の記事⑤を挟み込んだ。故秦の北に展開した局部的な城塞の長城建設が、帝国北辺全体の万里の長城に拡大して述べられている。このことが統一後の長城建設の実態を見誤らせる原因となっている。

これらの一連の記事は統一後に建設された地域を異にした二つの城塞の長城ことを述べている。すなわち一つは「河上の城塞」として四十四(本紀の方が年表と列伝の四十四を三十四と誤った可能性が高い)の県城を黄河沿岸に連ねた長城であり②、もう一つは直道を北上して黄河を渡り、北岸の山地に沿って築いた「陽山の亭障」である③。前者の城塞は前漢の時代になっても、高祖二年に早々に「河上の塞を繕治す」(『史記』高祖本紀)として修築され、後者の亭障は一度失ったオルドスを回復した武帝時になってはじめて修築された。そして「陽山の亭障」の方は戦国趙の代から陰山、高関に至る旧長城を修復したものであり、現在でもその遺跡は残っているが、「河上の城塞」の方はいまだその遺跡が発見されていないだけに、その位置については見解が分かれる。

さて前節で見てきたように、戦国時代には隴西、北地、上郡の三

郡を北辺の拠点にして長城を築いていた秦が、統一後に戦国の西北長城を越えて北方の黄河に到達するには、三郡から北上する三つのルートがあり、それぞれの終着点となった黄河沿岸流域が異なっていたことを確認しておきたい。まず最西端の隴西から洮河に沿って北上すれば、現在の甘肅省蘭州付近の黄河上流に出、この辺りが河上の城塞の起点になった榆中であつたのだろう。前漢昭帝始元六(前八二)年に設置された金城郡下の榆中県(『漢書』地理志)は、秦の榆中に因んだ地名である。一方北地郡朝那の戦国長城(現固原)を清水河に沿って北上すれば、現在の銀川の位置する寧夏平原の黄河に出る。調査でもこの固原・銀川ルートを北上した。ここは前漢時代には靈武、廉、富平県などが置かれたが、秦の時代にはまだ開拓されてはいなかった。秦渠や秦家渠という黄河の分水渠の名称も、少なくとも元代以降に秦が開拓したという伝説に基づいた呼称であり、秦とは直接関係ない。さらに三つ目の上郡からオルドス草原を北上すれば、現在の陰山山脈の南を東西に流れる最北の黄河流域九原の地に出る。九原とは黄河が分流しながら緩やかに流れ、分流によって形成された多くの平原という意味でつけられた地名であろう。このように統一秦の時期には三つの黄河流域相互を横になぐ道はなく、三本の北上ラインが相並んでいたと考えてよい。

秦がこうした北辺を流れる黄河にこだわったのは、やはり対匈奴前線としての防衛の役割であった。始皇二六年の秦始皇本紀の記事に「更めて河を名いいて徳水と曰い、以て水徳の始と為す」とあり、河(黄河)を徳水と改名したのは、始皇二六年であつたかは別にしても、水徳を重んじて河川の呼び方を水とし、なかでも北方の黄河

を特別視して徳水（徳の河川）としたからであろう。

前二二二（始皇三三五）年、まず首都圏の防衛として、函谷関から侵入してくる敵を防衛するために（始皇帝兵馬備の地下軍団はまさにその象徴であろう）、咸陽の東方の重要拠点麗邑に三万家を移し、そして上都に出る直道の起点雲陽にも五万家を移した。翌年の前二二一（始皇三三〇）年には、「北河の榆中」に三万家を移した。「北河の榆中」は「北河と榆中」として九原一帯を指す解釈もあるが、「北河の榆中」と読むべきであり、榆中は甘肅省蘭州付近の現在の榆中一帯にあった。<sup>(15)</sup>すでに秦の恵文王が初更五（前三二〇）年に「王游びて北河に至る」（秦本紀）の記事は、六国年表では「王北のかた戎地に遊び、河上に至る」と言い換えてあり、当時の領域からしても隴西の黄河のことであり、九原の黄河ではありえない。「北河」すなわち「北方の河（黄河）」という地名は、秦の「河南」（オールドス）が漢の「河南」（秦時の三川郡を高祖のときに河南郡と改称、郡治は雒陽）に変わっていったのと同様に、「隴西の黄河」から「九原の黄河」へと領域の移動に伴って、その指し示す区域が移動していったものと思われる。その秦の時代の北河への徙民は、六国年表では「民を北河の榆中に徙し、耐徙三処、爵一級を拜す」と記述されている。「耐徙三処」の意味は取りにくいので、徐広は耐を家とする版本があるとし、会注考証では三処は三万として本紀の記事にしたがって徙民の家の数と見ている。同時に徙民の行われた麗邑、雲陽には一ヶ所にそれぞれ三万、五万家を移しているの、この場合も北河の榆中という一ヶ所に三万家移したと解すべきであろう。河上の塞に置かれた四十四の県は、榆中から黄河に沿って陰

山まで連ねたと秦始皇本紀では述べている。

関連する記事に見える陰山、陽山、陶山の地名は、混乱があるのでも整理しておかなければならない（後掲図参照）。戦国趙の長城の西端は陰山に沿って高関に至るとい（匈奴列伝）、秦の北辺の記述でも陰山に沿って遼東に至るとしている（秦始皇本紀始皇二六年）、陰山とは黄河以北の現在の陰山山脈の東方部分であろう。一方蒙恬の軍が黄河を渡って拠点としたのが陽山であり（匈奴蒙恬列伝）、その地には高関、北阪中の地があったので現陰山山脈の西部が陽山であった。秦始皇本紀で陶山としているのは、字形が似ている陽山を誤ったとする解釈に従いたい。とすると陰山、陽山は東西に連なることになるが、徐広が陰山を河南、陽山を河北に置き南北に対置させているのは、河の南を陰とい北を陽という一般的説明に拠っているものであろう（蒙恬列伝集解引『史記音義』）。徐広は秦始皇本紀二六年の陰山の説明では五原の北、あるいは五原西安陽県に陰山があると矛盾した説明をしているので、陰山も黄河の北としたほうがよい。すでに戦国趙の北辺の領域に陰山があったが、その地に趙に代わって遅れて入った秦が、あらたに陰山山脈の西部を占領したときに、旧来の陰山に対して陽山としたのであろう。<sup>(16)</sup>北阪中や高関も、草原と黄河流域を屏風のように遮断する陽山山麓の地名である。北阪は「北方の田官が開拓地を貧民に仮す」（匈奴列伝集解、素隠）意味からきた地名である。

このように整理して秦始皇本紀三三年の記述に立ち返ってみると、榆中から陰山までの長城が黄河に沿って造られ、三十四の県が並んで設置されたように読める。しかし榆中以北の黄河沿いには、現在

までのところ何らの遺跡も発見されていないので、黄河、賀蘭山沿いに城壁を連ねた統一秦の長城が建設されたことは疑わしい<sup>1)</sup>。また城塞の県が沿岸に点在していたとしたら、秦始皇本紀で三十四、六国年表と匈奴列伝で四十四、また徐広が見た『史記』の六国年表には四十四県のほかに二十四県とするものもあったという(集解引)。秦は商鞅変法のとぎにも三十一県(六国年表)あるいは四十一県(秦本紀)を集中して新設したが、このときにも匈奴の勢力地であった黄河沿岸を占領し、県を集中的に設置した可能性もある。ちなみに『漢書』地理志に見える榆中から陰山に至る黄河沿岸の県を西から順番に拾い出して見ると、金城郡(昭帝始元六年置)の金城、榆中県、天水郡(武帝元鼎三年置)の勇士県、安定郡(武帝元鼎三年置)の陶卷、北地郡(秦郡)の富平、靈州、靈武、廉県、朔方郡(武帝元朔二年置)の臨戎、沃嬖、広牧、臨河、朔方、渠搜、呼遼、五原郡(秦九原郡、武帝元朔二年改名)の河目、西安陽、成宜、宜梁、河陰、五原、九原、臨沃、穉陽県、雲中郡(秦郡)の咸陽、沙陵、雲中、沙南、楨陵、原陽、北興、武泉、陽寿、陶林、犢和県など三十五の県があり、一見秦代にも同規模の県が置かれたようである。しかしこの県数は前漢になって本格的に開発した北地郡北の寧夏平原や、朔方郡などの諸県を多く含んでのものであり、秦の県だけで三十四から四十四の数値にはとうてい達しない。秦代の状況のなかで考えて見ると、榆中から陰山まで平均的に分散していたのではなく、榆中付近(隴西郡)、陽山、陰山(九原、雲中郡)といった秦の拠点に集中していたのであろう。しかも渡河の陽山の亭障に対して、河上の城塞として挙げられているので、三十四、四十四

県とは黄河以南の沿河の城塞のことであり、黄河を越えた陽山や陰山付近は含まない。三十四から四十四の県の設置は、榆中から陰山に至る距離においては適切な数値ではあったが、対匈奴戦争のさなかにおいてのあくまで軍事目標であったように思われる。実際には河上の城塞とは、隴西郡を北上した榆林地区に集中していたのであろう。始皇三六(前二二一)年になって、榆林に三万家を移そうとしたのはその表れであった。

旧戦国秦の西北長城によって隴西、北地、上郡の防衛はすでに確保されていたから、統一後もそのラインは放棄せず、そこから塞外の黄河流域までの空間が新たな統一秦の領域となったが、それは全面的な領域の拡大ではなく、榆林地区、九原陰山地区、陽山地区の三地域を局部的に占領するものであった。したがって黄河河道を全面的に国境とするには至らなかった。蒙恬の活動舞台は「師を外に暴すこと十余年」(蒙恬列伝)にあるように、上郡から九原に抜けるルートであり、榆中ルートではなかった。匈奴の活動地に対応した上郡が戦略基地となったのであろう。その蒙恬が捕えられるのも上郡の西南の陽周であり、伝蒙恬墓も上郡の南、陝北綏徳県にある。秦にとってみれば、上郡は魏から奪い、陽山一帯は趙から奪った新しい領域であった。

現在統一秦の長城として確認されているのはわずかに九原の地の長城である。内蒙古自治区固浪山、烏拉特前旗、固陽、武川、卓資、集寧へ続くものである(後掲図参照)。しかしその南に平行する旧趙国の長城の一部であるのか、新たに統一秦が造ったものであるのか、判別する十分な証拠があるわけではない。統一秦の長城は、秦

統一時ではなく、秦帝国後半、匈奴との戦争のなかで建設された。前二二二（始皇三四年）年には「治獄の吏の不直なる者を適して長城及び南越の地に築く」（秦始皇本紀）とあり、不正を行なった獄吏を南北の辺境に移して長城と南越の城を築かせたとあるが、壮大な長城が前二二一年直後の統一時の事業として十分実施されたわけではない。前二二五年以降の対外情勢の悪化という事態のなかで戦時体制が整えられ、北の長城、南の城砦、軍事道路直道の整備などの事業が同時に進められたのである。

蒙恬が亡くなり、秦帝国も崩壊すると、オルドスは再び匈奴の領有する地となり、故塞（戦国秦の西北の旧長城）が漢王朝との境界となった（匈奴列伝）。高祖二（前二〇五）年、漢王劉邦が項羽の諸王を下して秦の故地関中を押さえ、隴西、北地、上郡を占領して自らの郡を置いたときに、「河上の塞」を修繕したが、この河上の地は隴西の北部であって、「陽山の亭障」ではなかった。当時はまだ秦帝国崩壊後の楚漢の勢力による内戦状態が続くなか、匈奴の地となった河南オルドスを越えて、北方の黄河流域にまで出られる状況ではなかったからである。しかし一応前漢王朝も安定した文帝期になると、匈奴の南進は国家の脅威として意識されるようになった。このとき電錯は、秦のときの「北のかた胡貉を攻め、塞を河上に築く」事業を民心の恨みを招いた失敗例としながらも、その河上の塞を失地回復の目標としてあげ、辺境防衛の必要を説いた（『漢書』巻四九電錯伝）。その後武帝の時代に入ると、匈奴との外交問題が一層深刻化し、秦の匈奴戦争を取り上げながら辺境の守りの必要性如何が様々に議論された（『漢書』巻六四上主父偃伝）。しかしこ

ではもう秦の河上の長城についての正確な認識は失われてしまったようである。

主父偃の提案で朔方郡が設置され、九原の黄河流域が注目されたときに、公孫弘は

秦の時嘗て三十万の衆を發し、北河に築き、終に就く可からず、已にしてこれを棄つ。

といい、秦では区別されていた「陽山の亭障」と「河上・北河の城塞」を混同し、城塞の建設は完成しなかったといっている。主父偃自身、匈奴を伐つことを諫めて、李斯も反対した匈奴戦争の犠牲が秦の滅ぶきっかけであったという。

秦皇帝聴かずして、遂に蒙恬をして兵を將い、胡を攻め、地を卻かしむること千里、河を以て境と為す。地固く沢鹵にして、五穀生ぜず、然る後、天下の丁男を發して以て北河を守る。兵を暴き師を露すこと十有余年、死者致うるに勝えず、終に河を踰え北する能わず。…又天下をして芻を飛ばし粟を輓かしめ、黄、腫、琅邪の海を負う郡より起こし、北河に転輸し、率を三十鍾に一石を致す。男子は耕に疾むるも糧餉に足らず、女子は紡績するも帷幕に足らず。百姓靡敵し、孤寡老弱は相い養う能わず、道に死す者相い望み、蓋し天下始めて叛するならん。

ここでも蒙恬の占領した地が北河とされ、山東から北河にまで軍糧を輸送した負担が秦の滅亡の原因であるとされた。結局、武帝のときにはかつての蒙恬と同様に、將軍衛青が河南の地を収めて高闕まで行き、朔方、五原の地に郡を置いた。前一二七（元朔二年）漢遂に河南の地を取りて朔方を築き、復た故秦の時蒙恬の塞を為る所

を繕い、河に因りて固と為す」(『漢書』卷九四上匈奴列伝)とあるように、朔方すなわちもとの秦の九原の地にあった「蒙恬の塞」は修復され、司馬遷も北辺から戻るときに見ることができた蒙恬の長城の亭障も、「陽山・九原の城塞」であった。漢王朝は百年ぶりに失地回復はできたが、すでに蒙恬の故事とともに、秦の城塞の長城は廢墟となっていた。さきに挙げた九原、雲中郡の漢渠のなかには、秦に由来するものもあったものと思われる。

すでにふれたように戦国秦の昭襄王のときにすでに確保した西北辺境三郡の隴西、北地、上郡へは、郡咸陽から放射状に交通路が延びていた。三郡は黄土高原の北端に位置するので、その交通路は渭水盆地から黄土高原の断層を登ったあとは、高原に無数に走る浸食溝を避けながら河川沿岸の段丘の道を選ばざるをえない。それでも西の隴西郡へは渭水、西北の北地郡へは涇水沿いの平坦な自然道を選ぶことができるが、もともと魏の支配下にあった東北の上郡へは、自然道を迂回する経路を選択する必要があった。もし洛水の流域道を利用するとしても、黄河に東流する延河、清澗河、無定河を南北に何度も縦断する困難が伴う。魏の惠王は十九(前三五二)年に「長城を築き、固陽を塞いだ」(『史記』卷四四魏世家。もともと安邑(山西省夏県)に都を置いていた魏にとって見れば、黄河を渡り、その支流を遡って無定河から上郡へ出る道はそう難しいものではない。

秦が魏から奪った上郡を拠点に、蒙恬が黄河最北端の九原の地を目標し、匈奴との戦いに臨んだのは、九原にすでに長城を築いていた戦国の趙や、上郡を押しさえていた魏を滅ぼしてから後のことであ

った。その後咸陽と上郡、上郡と九原とを結ぶ軍事道路の建設が求められた。上郡・九原間のルートは、オールドス平原を通過するので、直線の最短経路を取りやすいが、一方の咸陽から上郡へのルートは、黄土高原の深谷の地形であるので、直線道路を簡単にとることはできなかった。

秦始皇本紀始皇三三(前二二二)年の記事では直道は、「道を除<sup>ほ</sup>い、九原道<sup>き</sup>り雲陽に抵<sup>いた</sup>り、山を斬り谷を堙め、これを直通す」とあり、九原を起点、雲陽を終点とし(匈奴列伝も「九原自ら雲陽に至る」)、六国年表では「直道を為り、九原道り甘泉を通ず」とあり、終点は甘泉となっている。甘泉とは秦時には甘泉宮ではなく雲陽にある山であり、黄帝が万霊を迎えたとの伝えのある明廷とい(『史記』卷二八封禅書)、またこの雲陽甘泉山は匈奴が金人を作って天を祭ったという伝説もあった(匈奴列伝集解引「漢書音義」)。

いづれにしても黄帝や匈奴とも縁のある雲陽甘泉山は、秦にとって軍事道路直道の起点終点としての重要な機能をもたされた。軍事道路ゆえに万一匈奴の軍が逆に進軍する可能性もあり、隴西、北地の道とは異にして終着点は咸陽まで通さずに、子午嶺の雲陽に止めた。

この雲陽と九原とを結ぶ新道がどこを経由していたのかは、『史記』にはいっさい記載がない。二点を結ぶ道路が直道と呼ばれたことからすれば、黄土高原とオールドスの草原という地形を考慮してできうる限り短いコースを選んだことは確かであるが、咸陽の西北雲陽から九原方面へ北上するには、河川沿岸の深谷道を取れば、黄土高原の地形特有の河川間の分水嶺という平坦な山稜道を選び、オールドス平原に入ると、草原の直線道路を一気に敷くことができる。

西は涇水とその支流の馬連河、東は洛水とその支流の葫蘆河の中間をぬうように子午嶺を通過した可能性は、すでに『括地志』のなかで言及されている。「秦の故道は慶州華池県西四十五里の子午山上に在り。九原自り雲陽に至る千八百里」とあるのは、道路遺構が子午山嶺にあったことを語っている。子午山とは稜線が南北に走っていることから名付けられた。史念海氏はすでにここを調査している。

司馬遷自ら実見し語った「山を塹り谷を堙め」（秦始皇本紀および蒙恬列伝太史公曰論贊）というこの意味は、オールドス平原部の直道北路ではなく、黄土高原下の直道南路の工事の状況を表現したものであろう。雲陽甘泉山から出て子午嶺を北上する部分は「山を塹て」分水嶺を平坦化し、子午嶺から北は「谷を堙める」溪谷水沿岸の工事となった。山稜路、溪谷路、そして草原路を九原まで走ったのが直道であった。山陵溪谷部分はより短路の直線を選択するものの、地形に左右されるのでかみならずしも全体としては南北の一直線にはならない。子午嶺を北上したあとは迂回して上都を経由するか、そのまま北上するか二つの可能性が考えられ、史念海氏は北上上都不經由説をとっている。

一九八八年に榆林県交通局賀清海氏が榆林県城北で延長約七十キロ、幅百六十メートルの秦直道遺跡を発見してすでに報告したが、その後全面的に否定し、その遺跡は統一秦以前の戦国古代道路遺構であるとの見解に改め、新たに上都を通過せず九原に直結した榆林郊外の短路の遺構を秦直道であるとした。<sup>20</sup>しかしながら、戦国秦の道路が統一秦の直道かの見極めは、非常に困難であり、道路遺構の实地調査の成果を秦直道に直結するには、より慎重でなければなら

ない。単純に周辺に散乱する瓦片の時代が道路の造営年代であると見るわけにもいかない。

筆者自身調査経路の途上榆林を訪れ、直道とされた遺構を実見できなかったが、現在のところ、史念海氏の見解通り戦国秦の上郡ルートとは別に、新たに造られた子午嶺を通る北上ルートが直道であると考えておきたい（後掲図参照）。上郡は戦国秦にとって対魏戦路上重要であったが、統一後は対匈奴戦略のために咸陽から上郡を迂回する難道を避け、九原へ直結する第四の北上ルートが求められ、上郡の重要性は低下していったのである。

### 三 「万里の長城」の実態

始皇二十六年の秦始皇本紀の記事では、

法度衡石丈尺を一にし、車は軌を同じくし、書は文字を同じくす。地は東は海に到り、朝鮮に暨び、西は臨洮、羌中に至り、南は北嚮戸に至り、北は河に據りて塞と為し、陰山に並いて遼東に至る。

と、度量衡・車軌・文字の統一に続けて、秦の統一帝国の領域の概略について述べ、北辺は黄河に沿って城塞を造り、陰山に沿って遼東まで延びているといっている。しかし「北は河に拠りて塞を為し、陰山に並いて」というのは下って始皇三三年の段階によりやく建設される「河上の城塞」のことであった。始皇二十六年六年表には長城に関する何の記事もないように、二六年時にはまだ統一秦のあらたに造営した万里の長城はなく、あったとしても戦国燕・趙・秦の北辺の長城が残っているだけであった。<sup>21</sup>前節で見えてきたように、始

皇三三年にまず蒙恬が三十万の兵を率いて河南を占領し、翌三三年には蒙恬がその北の黄河を渡つての旧趙長城の陰山の西に「陽山の亭障」を築き、一方で同年、隴西北の黄河（北河）の楡中に「河上の城塞」を築いた。この河南オールドス周辺の二つの城塞の長城という局部的長城の建設という現実のなかで、いかにして万余里の長城が築かれたことになっていったのだろうか。

万里の長城が全面に出てくるのは、匈奴・蒙恬両列伝の記事である。ここでは列伝としての文脈で長城の歴史が語られているので、本紀や年表の記事のように時間の経過にかならずしも忠実ではない。まず匈奴列伝から見よう。

①秦昭王の時、義渠戎王、宣太后と乱れ、二子有り。宣太后詐りて義渠戎王を甘泉に殺し、遂に兵を起こして義渠を伐ちて残す。是に於て秦に隴西、北地、上郡有り、長城を築き以て胡を拒む。②而して趙の武靈王亦胡服に倣俗し、騎射を習い、北のかた林胡、樓煩を破り、長城を築く。代自り陰山に並いて下り、高関に至るまで塞を為し、雲中、雁門、代郡を置く。③其の後燕に賢將秦開有り、胡に質と為り、胡甚だこれを信とす。帰りて襲ひ破りて東胡を走らすに、東胡卻くこと千余里。…燕亦長城を築き、造陽自り襄平に至る。上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東郡を置き、以て胡を拒む。④是の時に當り、冠帯の戦国七にして三国は匈奴を辺とす。其の後趙將李牧の時、匈奴敢えて趙の辺に入らず。⑤後に秦、六国を滅ばし、而して始皇帝、蒙恬を使用して十万の衆を將いて北のかた胡を撃ち、悉く河南の地を収む。河に因りて塞と為し、四十四県の城を築き河に臨み、

適戍を徙してこれを守らしむ。而して直道を通じ、九原自り雲陽に至る。⑥因りて山險を辺とし、谿谷を壘とし、繕う可き者はこれを治め、臨洮より起き、遼東に至るまで万余里。⑦又河を度り、陽山の北假中に拠る。…⑧十余年にして蒙恬死し、諸侯秦に畔き、中国擾乱するや、諸を秦の徙す所の適の辺を成る者は皆復た去り、是に於て匈奴寛きを得、復た稍河南に度りて中国と故塞に界す。

この匈奴列伝では、燕・趙・秦三国が北辺長城を築いて胡（匈奴）を斥け、秦は六国を滅ぼしたあとに蒙恬が河南を占領し北の黄河を渡つたことを述べている。細かく見ると、①、②、③で秦の昭襄王、趙の武靈王、燕は將軍秦開のときに、それぞれ義渠、林胡・樓煩、東胡といった北方の民族を破つた後に郡を置き、長城を築いて防衛したことを述べる。戦国七雄のうちのこの三国が、やがて北辺三長城を境に匈奴と接することになる④。⑤以下は秦の統一以降の記事であり、⑥では蒙恬の河南占領と、河上の城塞と、それと一体化した軍事道路の直道建設のことを記す。

この文脈のなかで、蒙恬による河南オールドス占領、河上四十四県の城塞、直道の建設と時代順に言及し、そのあとに「万里の長城」と「陽山の亭障」の記事を挙げる。年代の前後からすれば、明らかに「陽山の亭障」は「河上の城塞」と並べ、しかも別個の事件として記述すべきであるが、直道と万里の長城の記事を挟んでしまった。それは本紀の記事の方が基本的には「秦記」の年代記事に依拠しているのに対して、匈奴列伝の方は蒙恬の事績をまとめて述べるため

に、司馬遷が記事の組み替えを行ったからである。その組み替えのなかに、司馬遷の秦長城認識の錯乱がうかがえる。すでにふれたように、前漢武帝の時代に河南オルドスと北端黃河流域の九原を回復したために、漢代にはこの黄河を北河を呼び、武帝も元封元（前一〇〇）年に北河に臨んでいる。司馬遷は漢の北河と秦の北河を同一視して、北河「河上の城塞」の後にその九原の地から雲陽に延びる直道の記事が続けてしまった。その結果まず河に臨んだ城塞のことを述べたあとに、さらに河を渡って陽山・北坂中に拠点を置いたことに言及した。しかし直道建設と陽山占拠といった河南周辺の戦果を述べる下りに置かれた万里の長城の記事は、蒙恬の功績を列举したとはいえ、不自然であり唐突である。「因りて山險を辺とし、谿谷を壅とし、繕う可き者はこれを治め」という文章の意味は、險しい山ではそれを境とし、溪谷があれば堀として境とし、自然の要塞がない所では長城を造成するということであり、これは蒙恬列伝でいう「長城を築くに、地形に因り、用て險塞を制す」や、太史公自序で蒙恬列伝の執筆目的について述べた「河に拠りて塞を為し、山に因りて固と為す」に相当し、自然の地形に合わせて長城を築いたことをいっているのであろう。本紀、年表ではなく、蒙恬列伝の万里の長城記事に依拠した内容であろう。

蒙恬列伝は明らかに蒙恬に関する故事を中心に展開して記述している。蒙恬という人物は、祖先は斉の人で、蒙鶯、蒙武、そして蒙恬・蒙毅兄弟と三代にわたって秦の將軍として仕えた家柄で、秦の統一事業に功績があった。始皇帝の長子扶蘇とともに不運にも北辺で命を絶ち、伝説化されてもおかしくない人物といえよう。司馬遷

の蒙恬評価はいたって極端であり、統一までの戦争過程では名將軍と称えながら、統一後は民衆の犠牲の上に長城建設を敢行したことを批判する。先の蒙恬列伝の論贊に続けて

夫れ秦の初めて諸侯を滅ぼすや、天下の心未だ定まらず、虜傷する者未だ瘳<sup>い</sup>ず。而るに恬の名將為るも、此の時を以て彊く諫め、百姓の急を振わせ、老を養い孤を存し、務めて衆庶の和を修めず。而して意に阿いて功を興せば、此れ其の兄弟誅に遇うも亦宜ならざらん。何ぞ乃ち地脈に罪あらんや。

と断言する。このように最初に持ち上げて後で貶めるという評価の仕方、李斯に対するものと同じであり、結局は秦という時代の評価にも共通している。しかし蒙恬列伝の内容は、太史公司馬遷の論評とは別に、蒙恬寄りに悲劇的な臨終の情景が実にドラマティックに描かれている。

司馬遷のように、一人の人物評価を時代の変化で変えていくような蒙恬批判は、時代が下るともう見られないが、匈奴問題の緊迫化とともに蒙恬論は盛んになってくる。前漢昭帝の始元六（前八一）年に塩鉄専売をめぐって行なわれた塩鉄論では、蒙恬の匈奴戦争自体に賛否の意見が戦わされた。中央政府側の御史大夫は蒙恬を英雄として賛美した。

蒙公秦の為に撃ちて匈奴を走らすこと、鷲鳥の羣雀を追うが若く、匈奴の勢いは摺<sup>ま</sup>れ、敢えて南面せずして望むこと十余年。

其の後蒙公の死するに及び、而して諸侯叛し、中国攘乱、匈奴紛紛として、乃ち敢えて復た辺寇と為らず（『塩鉄論』伐功第四五）。

ここでも蒙恬列伝と同様に、蒙恬は秦の統一以来十数年辺境で活躍との誤解が見える。一方の論者文学たちの見方はまったく逆である。

蒙恬の胡を卻くこと千里なるは、功の無きに非ざるなり。威の天下に震わすは、強からざるに非ざるなり。諸侯の風に随いて西面するは、従わざるに非ざるなり。然るに而して皆秦の亡ぶ所以なり。商鞅権数を以て秦國を危うくし、蒙恬千里を得るを以て秦の社稷を亡う（同非鞅第七）。

蒙恬の武力攻撃が結果として亡國の原因になったという。その文学の批判に遭えば、蒙恬は、秦始皇本紀では敵対していた趙高とも並べられてしまう。

趙高は獄を内に治め、蒙恬は兵を外に用うれば、百姓愁い苦しみ、心を同じくして秦を患う（同褒賢第十九）。

これほど評価に差が出るのは、やはり前漢時代の人々が現実の匈奴問題を前にして過去の蒙恬に仮りながら戦争遂行の賛否を論議しているからであろう。蒙恬列伝での司馬遷の蒙恬評価も、武帝の現代の対匈奴問題と重ね合わせた形で下されたのであろう。司馬遷の場合には統一という時代を境にして正負の評価をしていたが、塩鉄論議では、匈奴との戦争について二つの対立する意見が出された。

蒙恬列伝の長城記述は、「河上の城塞」の建設のことを臨洮から遼東に至る長城建設と誤解し、河南オールドスの地の局部的長城ではなく、秦帝国樹立のときに西は臨洮より東は遼東まで一万余里（約五千キロ）の壮大な長城を築いたことになっている。この記述は蒙恬の自害の最期の場面の伏線となっているので、列伝記事の展開としては実に効果的である。すなわち前二一〇（始皇三七）年始皇帝

の死の直後、公子の胡亥（二世皇帝）を擁立した趙高は、始皇帝にとりいれられた蒙恬が勢力をもつことを恐れ、かれに死罪を言い渡すように謀った。何の罪を受けたのか身に覚えのない蒙恬の最期のことばに、再び長城のことが出てくる。万里の長城の建造によって地脈を絶ちきったことが、しいていえば自分の罪であろうという残り、服毒自殺を図った。司馬遷自身蒙恬の権力におもねる態度を批判しながらも、劇的な最期として記録したのである。もちろんこれは司馬遷の創作ではなく、蒙恬の故事を掲載したものである。故事に語らせた万里の長城の実態にこそ、眼を向けるべきであろう。

問題は「臨洮より起き、遼東に至るまで万余里」の統一秦の長城と戦国三長城の関係である。司馬遷の認識は、戦国秦の長城の起点であった臨洮から燕の長城の西端までを数えて万余里としている。

統一秦の行なった長城工事のなかで、「河上の城塞」については明記しているが、ほかの所は「繕う可き者はこれを治む」としてあるだけである。植村清二が「蒙恬はこれらの旧長城を利用し、その故塁を修理し、中間の絶えている部分を接続させて、一つの連続した長城を完成した」といったのは、この「繕う」を戦国長城の修繕と解釈したものであろう。⑦以下は秦の優勢から蒙恬の死、秦帝国の崩壊とともに劣勢に傾いていったことを述べ、蒙恬が占領した河南の地も再び匈奴の支配下になり、故塞（戦国秦の長城）まで戻ったという。したがって「臨洮より起き、遼東に至るまで万余里」の統一秦の長城とは、戦国秦の長城は含まず、蒙恬の築いた新塞（河上の城塞、陽山の亭障）と、趙、燕の旧戦国長城とを合わせたものをいっているのであろう。

蒙恬列伝の「用て險塞を制す（用制險塞）」の意味は、「險塞（險阻の城塞、長城のこと）を造った」のか、「險塞（險阻な場所）に城塞を造った（制すの意）」のか、あるいは「用制險塞」を「用險制塞」とする版本があることから「險を用て塞を制し」と読み（『史記会注考証』<sup>23</sup>）、「險阻な地形を利用して城塞を造った」のか解釈が分かれる。匈奴伝の記事の「山險を辺とし、谿谷を壟とす」に相当すると考えると、最後の説が妥当であろう。そうすると匈奴列伝の先の意味も、自然の山や谷の地形に頼りながら、長城を造成していったことになる。戦国秦や趙の長城は版築や石積みの長城を築いたが、「河上の城塞」は点であって線の長城ではなかった。

さて蒙恬の死は前二一〇（始皇三七）年のことであるから、かれが秦の將軍として最後の齊を破ってからは十一年が経過している。蒙恬列伝の「師を外に暴すこと十余年、上郡に居る」というのは、統一の直後も將軍として北辺の上郡にいたかのように書かれており、十余年と符号する。また卷八七李斯列伝に始皇帝の死に当たって捏造された長子扶蘇宛ての文書に

今扶蘇、將軍蒙恬と師數十万を將い、以て辺に屯すること十有余年。進みて前む能わずして士卒耗多く、尺寸の功無し。

とあり、これによっても始皇帝の死の前二一〇年まで十数年、扶蘇と蒙恬は辺地にいたことになる。すなわち前二二一年の統一時から辺地に赴いていたことになる。

しかし齊を攻撃した功績で内史という秦の京師を治める重要な官に就いた蒙恬が、すぐにまた咸陽の都を離れ北辺に移されたとは考えにくい。また長子の扶蘇が、焚書坑儒を行なおうとした始皇帝を

諫め、怒りをもって上郡の蒙恬の所に移されたのは、秦始皇本紀では始皇三五（前二二二）年のことであった。この二人が数十万の兵を率いて始皇二六年以来北辺に駐屯したとは考えられない。蒙恬の長城を始皇二六年に置き、統一事業の一つにしようとしたための記事の混乱であろう。

長城記事はもとの秦地に偏っており、旧東方六国の北辺の長城については「遼東に至る」として長城の東端を述べるだけで、何ら具体的な記述がない。おそらく多少の修改築はあるものの、基本的には戦国の長城を継承したからであろう。長城は北辺だけでなく、内地にもあったことは、顧炎武も指摘した点であるが、<sup>24</sup>司馬遷の戦国内地の長城の記述は、『史記』卷六九蘇秦、蘇代列伝、趙世家、魏世家などに、戦国の諸王や外交家たちの言論のなかで、諸国の領地の境界に言及するときに見えるので、もともと司馬遷自身の認識に基づいたわけではない（表1参照）。蘇秦が魏の襄王に説く言論に、魏の領土の西には「長城の界」があるという（蘇秦列伝）、蘇秦の弟代と燕王の対話のなかで、齊の長城の防備の程度が問題とされ（蘇代列伝）、趙の武靈王も南に長城のあることにふれ、（趙世家）、戦国記事として「（魏）長城を築き、固陽を塞ぐ」（魏世家）と語られている。

司馬遷の記述では、中華帝国の樹立後は、匈奴との国境の長城が華夷の区別として強調され、内地の旧戦国諸国間の長城はいつの間にか除外されていた。司馬遷の長城に関する記事はオルドスの長城に集中しているが、始皇本紀始皇三二（前二一五）年条に引く碣石門に刻した文の意味は、注目される。

①皇帝威を奮い、徳は諸侯を并せ、初めて一にして泰平なり。  
 ②城郭を墮壊し、川防を決通せしめ、險阻を夷去す。③地勢既に定まり、黎庶繇る無く、天下咸撫す。

これは臣下が始皇帝の統一事業を回顧して顕彰する内容の部分である。問題の箇所は②の文章の意味する内容である。司馬遷は「城郭を壊し、隄防を決通す」と読み取り、この歳の記事として収めている。しかし司馬遷は始皇三二（前二一五）年、始皇帝が碣石に巡狩した記事を、碣石刻石の文章に頼っているが、刻石の文章はそもそも統一事業を回顧したものであるから、かならずしも始皇三二年の事業とはいえない。しかも司馬遷は「城郭を墮壊し、川防を決通せしめ、險阻を夷去す」の刻石文を、「險阻を夷去す」の箇所を省いて解釈している。「城郭を破壊し、隄防を決通した」ことが、いかなる意味で統一事業であったのか、「險阻を夷去す」の意味まで含めて理解しなければならぬ。多くの論者はこのことを十分議論せず、安易に秦の統一事業の一つに全国の城郭を破壊したとこの史料として挙げてしまっている。

文脈からすれば城郭、川防、險阻を破壊、除去したことが天下統一を意味するのであるから、逆にそこから城郭、川防、險阻の意味を考えていくべきであろう。「城郭を壊す」とは賈誼の「過秦論」にいう「名城を墮す」に相当し、城郭とは全国の城郭一般ではなく、秦と敵対した東方六国の名城、すなわち戦国の国都のことである。「史記」正義に、張守節が「始皇、閩東諸侯の旧城郭を毀圻すると言うなり」という通りである。城郭が戦国諸国の中心であれば、川防と險阻は国境の守りのことになる。川防とは、楡林に築いた「河

を以て塞と為す」ようなものであり、河川を利用した防塁施設である。前漢末賈誼のことはよれば、戦国以来国境の河川に堤防を築き、洪水の際には隣国へ水を押し流して自国を防衛したという。戦国の斉と趙、魏は黄河を国境とし、斉が低湿の地に堤防を築いたところ、対岸の趙、魏に洪水が起こったので、趙、魏も同じように堤防を備えたという（『漢書』溝洫志）。春秋時代にも斉の桓公が盟主として前六五一年に葵丘で諸侯と誓った一つに、「防を曲ぐること無かれ」（『孟子』卷十二告子章句下）というものがああり、これは堤防を曲げて隣国に水害を及ぼすことを禁止したことをいう。国境を超えて黄河の流域全体の安全のために堤防を築くというのは、前漢武帝以降の治水の考え方であって、秦のときには各国の軍事目的の堤防を破壊するという政策しか見えない。

險阻とは、『史記』蒙恬列伝に出てくる「險塞」の意味からすれば、山間峡谷の地形に応じた長城のことをいっている。自然河川が池（堀）であれば、長城は城であり（『春秋』左氏伝、僖公四年）、両者一体となって重要な防衛方法であった。戦国諸国はお互いの対立抗争のなかで、河川と長城の国境を固めた。ようするに碣石刻石に見えるこの政策は六国の拠点の都城を叩いたうえで、河川に沿った防塁や長城などの六国の国境間の防衛施設を取り除いたことをいっている。羅哲文氏は「城郭を墮壊し」「險阻を夷去す」とは六国が互いに防衛するために築いた長城、閩所、城壁を取り壊し、六国貴族が割拠の頼りとしていた条件を根本から取り除く意味と解する。おおかたの解釈は誤っていないが、城郭を都城ではなく長城

ている点は不十分である。

こうした旧六国の城郭、河川防禦、長城を破壊、除去した時期は、司馬遷が秦始皇本紀にいう始皇三二（前二一五）年のことではなかったと思われる。司馬遷は前半部分の欠損した碣石刻石のなから、「墮壞城郭、決通川防、夷去險阻」の文に注目し、この年代を単純に誤って碣石巡狩の歳としてしまった。しかし刻石文の構成からして、この部分には始皇帝の統一事業を回顧し顕彰する内容がくるとは、この部分には始皇帝の統一事業を回顧し顕彰する内容がくるとは、おそらく東方六国を攻撃し滅ぼしていく戦争の過程ですでに実行されていった軍事的措置であったのであろう。前二二九（始皇一八）年、秦は端和に趙都邯鄲を囲ませ、前二三六（始皇二二）年、燕の薊城を占領して太子丹の首を取り、前二三五（始皇三二）年、魏の大梁城に黄河の水を流して攻撃したので、大梁城は破壊された。始皇帝を顕彰した刻石はほかに泰山、琅邪台、之罘、東觀、会稽の五刻石があるが、碣石刻石にのみ六国の都城、内地の長城を破壊する政策を記したことに理由はあった。碣石は諸侯の城郭（燕の下都と薊）を破壊した後に拠点を置いた離宮（碣石宮）の地であり、燕の内外長城のうち破棄された内城の地にあつたからである。

もちろん内地の長城を廃棄するといっても、すべての長城付近の石積みや版築を壊すまでもない。交通上の要地の長城、関所を壊せば、狼煙台、軍の駐屯した城砦などは人がいなければ自ずから廃墟となった。「漢書」地理志によれば、漢代にも南陽郡葉県に楚の戦国長城の遺跡があったという。「葉は楚の葉公の邑、長城有り、号して方城と曰う」と見え、楚がかつて北方の諸国韓、秦、魏に対し

て、北辺の国境に方城と呼ばれる長城を築いたことがわかる。劉宋の盛宏之の『荊州記』にも、

葉の東界に故城一面有り。蠻県より始まり東のかた瀨水に至り、泚陽界に達し、南北聯絡數百里、号して方城と為し、一に長城と謂う云（『水経注』卷三二）。

とあり、この葉県の方城の位置は南陽盆地の東北の出入り口の南側に当る。分断している東部の丘陵を方城で閉じて、防衛としたのであろう。西部と北部の方城についてはやはり『水経注』卷三二に驪県に故城一面有り。未だ里数を詳しくせず、号して長城と為す。即ち此の城の西隅にして、其の間相い去ること六百里、北面は基の築くこと無きと雖も、皆山を連ねて相い接す。

とあり、楚の方城の北は伏牛山の自然の要塞を長城とし、西側は南陽北の驪県まで南北に延びていたことがわかる。こうした楚の長城も、戦国秦の南下、侵略とともに実質形骸化し、統一後になって戦国内城の破棄が宣言されるなかで廃墟と化していった。

### おわりに

これまで見てきたように、戦国秦と統一秦の長城の実態についての理解は、次の通りになる。すなわち咸陽を中心とした戦国期の隴西、北地、上郡三ルート確保が黄土高原の峡谷の民の支配を固め、さらに三ルート間の横の連結性の欠如という弱点はオルドス平原との境に長城を建設することで補ったのである。秦が東方黄河を越えて六国を滅ぼした後は、西北三郡以北のオルドス草原と北方黄河の平原を二方向から目指すことになった。一つは隴西郡北の黄河流域、

北河の榆中地区に徙民させ、その後さらに北地郡北から賀蘭山沿いの寧夏平原の方へ黄河を北上しようとしたが、寧夏平原への侵略は実現しなかった。もう一つは蒙恬に上郡から九原へと北上して黄河を渡らせ、匈奴との戦争を始めた。この戦時体制のなかで、咸陽—上郡—九原という黄土高原の峡谷を迂回する難ルートよりも、上郡を経由せず子午嶺の山上を一気に抜けオルドス草原に入る雲陽—九原直結ルートが求められ、直道という軍事道路が建設された。対匈奴戦は戦国西北長城のラインを越えて河南、新秦中を取り込もうとした戦争であり、旧戦国趙の北辺の長城を継承、修築して城塞とした。その陽山（陰山山脈）の城塞の修築の程度は、まだ明らかではない。統一秦の長城とは、臨洮から遼東に至る万里の長城と見られているが、黄河流域に沿った西北部分は、必ずしも連結した長城の実態があるものではなく、黄河や賀蘭山、陰山山脈などの自然の要塞に頼る部分が多かったものと思われる。

司馬遷が戦国秦ならびに統一秦の長城の建設について記述するに際して依拠した史料は、「墜洛」「築長城河上」のような秦の史書『秦記』に基づくと思われる簡単な記述と、蒙恬列伝に見られるような臨洮から遼東に至る統一長城にまつわる故事があった。匈奴列伝はそのちょうど中間に位置する史料であった。『史記』蒙恬列伝の故事史料から読みとれることは、秦は戦国の趙、燕の北辺長城を継承しながら、統一後には臨洮から遼東に及ぶ万余里の長城を築いたことになる。しかし『秦記』に基づくと思われる本紀や年表では、始皇三二（前二一五）年に始まる匈奴との戦争のなかでにわかに進められた隴西北部の「河上の城塞」と黄河北岸の「陽山の亭

障」の二つの城塞と、後者と首都を結ぶ直道の工事について伝えるだけで、東方の北辺長城については東端の遼東に至るというだけで何ら具体的な記録はない。このように秦のもとの領域の長城に偏向した文献史料から、統一秦の万里の長城を統一時の完成された事業として見るわけにはいかない。故事のなかで「臨洮より起こし遼東に至る」万余里の長城を挙げながら、秦始皇本紀始皇二六年では、「北のかた河に拠り塞と為し、陰山に並いて遼東に至る」という秦帝国の北辺の国境に言及しながらも、万余里の長城とせず、始皇三三（前二一四）年の北辺の城塞の建設のことを取り上げているのは、司馬遷の歴史叙述の方法である。

たとえ万余里の統一長城の図式を画いたとしても、残されるものとも大きな問題は、長城の遺跡は確かに各地に存在するものの、統一秦の長城の遺跡が考古学的に十分検証されていないことにある。一秦の長城は戦国趙、燕の長城を修復しただけであるという見方もあれば、戦国趙、燕の長城とは別に統一の長城を築いたという見方もある。また統一秦の長城と見なされた遺跡が、漢の長城であるという見方もいる。ようするに長城の版築や石積みの遺跡は、歴代修築を繰り返していることもあって版築の時代の判定も難しく、散乱する瓦片などから時代が推測されているのが現状である。ときには遺跡を調査する者の先入観も加わってその時代が判定されてしまう。長城と一体化して建設された直道についても、戦国期や漢代以降の道路遺構との時代判別は難しく、結局最後の判断は調査した者の推断に委ねられる。

このような状況のなかで文字史料の出土を伴わない古代の西北長

城や道路の研究は、これまでも歴史地理、考古学など各専門の研究が取り組んできているが、遺跡、遺構と文献史料との照らし合わせの仕方が今後ますます重要な方法となることは間違いない。旧来の研究の問題点は、文献史料の内容や性格を整理せずに既存文字史料をそのまま全面的に信頼し、そこから遺跡の時代を推測してきたことにある。本稿は、まず「史記」の各種性格を異にする長城史料を整理したうえで、文字史料も歴史の局部しか語ってくれないことを十分認識しながら、遺跡との対応を試みたものである。文献史料も遺跡も歴史の事実というところのない全体から見ればごく一部しか語ってくれない。しかし一方で歴史の展開した舞台は、変化を遂げながらも、自然環境のなかで現在まで生き続けている。まだまだ人間の過去の営みを刻んだ遺構は土のなかに含まれている可能性があるので、今後ますます史料と遺跡からの歴史の点検が要請されていくであろう。

## 註

- (1) 顧頡剛「秦築長城材料絶少」(顧頡剛読書記「第五卷下」)。
- (2) 一九九六年八月二日から十四日まで陝西歴史博物館(周天游館長)主催のもとに全行程二五〇キロの陝西省、寧夏回族自治区の西北路調査のなかで、寧夏固原、陝西白水において戦国秦の長城を実見することができた。
- (3) 一九九四年九月には北京で第一回国際學術討論会も開かれた(中国長城学会編「長城學術研討會論文集」吉林出版社、一九九五年)。
- (4) 秦の内史については工藤元男「秦の内史―主として睡虎地秦墓竹簡による―」(史学雑誌「第九十編第三号」)、重近啓樹「秦の内史をめぐる諸問題」(堀敏一先生古稀記念中国古代の国家と民衆「汲古書院、一九九五

年)を参照。

- (5) 崔向东・秦芳「戦国人对秦為“四塞之國”的解釈」(中国歴史地理論叢「一九九五年第四輯」)。
- (6) 木村正雄「前漢時代に於ける関中の経営」(史潮「三十号、一九三三年」、藤田勝久「中国古代の関中開発、郡県制形成過程の一考察」(佐藤博士退官記念中国水利史論叢「国書刊行会、一九八四年」)。
- (7) 藤田勝久氏は、秦の領域は秦の本拠地が西垂から雍城、咸陽へと渭水下流へと移動していくなかで形成されたとし、関中、交通路に焦点を当てて論じている。(戦国秦の領域形成と交通路「出土文物による中国古代社会の地域的研究」一九九二年)。
- (8) 甘肃省文物考古研究所・天水市北道区文化館「甘肅天水放馬灘戰國秦漢墓群的発掘」(文物「一九八九年第二期」)。
- (9) 韓偉「論甘肅礼県出土的秦金箔飾片」(文物「一九九五年第六期」)。
- (10) 始皇帝陵出土の瓦については袁仲一「秦代陶文」(三秦出版社、一九八七年)。
- (11) 好並隆司氏は、戎翟の風俗をもつ秦の遊牧民的特異性を強調して皇帝権力の形成を考える(秦漢帝國史研究「未來社、一九七八年」)。
- (12) 彭曦「秦簡公・甄洛」遺迹考察簡報」(文物「一九九六年第四期」)。
- (13) 韓城市の魏の長城については注7前掲藤田勝久論文や、王重九「関中東部秦魏諸長城遺迹の再探索」(歴史地理「一九八七年第五輯」)参照。魏の長城の遺跡は、渭水南の華陰県や洛水東岸の大荔県西北に発見されているが、両地とも渭水平原の長城であり、洛水東岸の遺跡は、秦か魏の長城か見解がわかれている。史念海「再論関中東部戦国時期秦魏諸長城」(河山集「四集」)。
- (14) 「史記」正義では榆中を唐代の勝州榆林県(現在の托克托)としている。楊賢民も榆中を内蒙古自治区とし、三十四県は九原郡設置のこととし、北河榆中三万家もそれに続く九原のオルドス開発と見る(秦始皇「上海人民出版社、一九五七年、九十頁」。北河の榆林を九原オルドスとする説

は榆中と榆林を混同した唐の張守節に始まるものである。陳育寧・湯曉芳「秦漢時期黄河河套流域的經濟開發」(《塞上問史錄》)寧夏人民出版社、一九九三年、馬啓成「寧夏黄河水利開發述略」《西北史地》一九八五年第二期)なども榆林オールドス説。

(16) 陳守忠「榆中県歴史沿革」(《河隴史地考述》)蘭州大学出版社、一九九三年)は歴代の榆中県の沿革を追いながら秦漢榆中県城を上古城(現榆中県の北、黄河の東南)に比定する。「漢書」地理志金城郡、「水経注」の記載からも妥当であらう。

(17) 譚其驥編「中国歴史地図集」第二冊秦・西漢・東漢時期(地図出版社、一九八二年)は陰山、陽山を黄河北の東西に比定している。

(18) 魯人勇・吳忠礼・徐庄「寧夏歴史地理考」(寧夏人民出版社、一九九三年)では、寧夏の黄河沿岸、賀蘭山麓では秦長城の遺跡が発見されておらず、またとくに中衛県香山地区、甘肅省靖遠県一带は人家が少ないので、長城を作っていれば残るはずであるから、西北の長城が寧夏で黄河を渡り賀蘭山に沿って北上したというのは根拠がないとする。

(19) 漢代の甘泉宮遺跡については「淳化県古甘泉山發現秦漢建築遺址群」(《考古與文物》一九九〇年第二期)、姚生民「漢甘泉宮遺址勘察記」(《考古與文物》一九八〇年第二期)、同「關於漢甘泉宮宮主体建築位置問題」(《考古與文物》一九九二年第二期)参照。

(20) 史念海「秦始皇直道遺迹の探索」(《文物》一九七五年第十期)。ほかに延安地区文物普查隊「延安境內秦直道調查報告之一」(《考古與文物》一九八九年第一期)、王開「秦直道」新探」(《西北史地》一九八七年第二期)。

(21) 「秦直道史秘已被探明」(《榆林報》一九九五年八月二四日)、この内容は近く「直道図志」として出版される予定。

(22) 史念海氏は「二六」と三三の二度にわたって匈奴からの防衛のために長城を築いたという(論秦九原郡始置的年代)、史念海主編「中国歴史地理論叢」一九九三年第一期)。

(23) 植村清二「万里の長城 中国小史」(一九四四年のち中公文庫、一九七九年)。またすでに梁玉繩(清)も、秦がはじめて長城を築いたという通説を批判し、戦国時代に各国が造ったものを修築して万里に連ねたにすぎないことを指摘し、また始皇三三年に三十万の兵を率いてから三十七年に死去するまで六年しかないことから、十数年も辺地にいたという記述は誤っていると述べている(《史記志疑》卷三二「蒙恬列伝」)。

(24) 第一の説はたとえば小竹文夫・武夫訳「史記」(筑摩書房、一九六二年)、第二の説は小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳「史記列伝」(二)(岩波書店、一九七五年)、第三の説は羅哲文・趙洛「万里の長城」(北京外文出版社、一九八七年)など。

(25) 顧炎武「長城」(《日知錄》)。  
(26) 卵石を含めた始皇帝の刻石については、拙稿「始皇帝の東方巡狩刻石に見る虚構性」(茨城大学教養部紀要)第三十号、一九九六年)参照。

(27) 大櫛敦弘「秦代国家の統一支配」(『史記』「漢書」の再検討と古代社会の地域的研究)一九九四年)は、城壁破壊や内地長城破壊の政策を統一支配の軍事的措置として注視する。

(28) 前掲羅哲文・趙洛「万里の長城」。

#### 参考文献

##### ●戦国秦西北長城

羅哲文「臨洮秦長城、敦煌玉門関、酒泉嘉峪関調査簡記」(《文物》一九六四年六月期)

史念海「黄河中游戦国及秦時諸長城遺迹の探索」(《陝西師大学報》一九七八年二期)

寧夏自治区博物館・固原県文物工作站「寧夏境內戦国秦漢長城調査報告」(《中国長城遺迹調査報告集》文物出版社、一九八一年)

陳守忠「甘肅境內秦長城遺迹調査及考証」(《西北史地》一九八四年二期)

史念海「洛河右岸戦国時期秦長城遺迹の探索」(《文物》一九八五年二期)

史念海「鄂爾多斯高原戰國時期秦長城遺迹の探索記」、『中國長城遺迹調查報告集』

甘肅省定西地区文化局長城考察組「定西地区戰國秦長城遺迹考察記」、『文物』一九八七年七期

許成「寧夏古長城」寧夏人民出版社、一九八八年

延安地区文化普查隊「延安地区戰國秦長城考察簡報」、『考古與文物』一九九〇年六期

李紅雄「甘肅慶陽地区境内長城調查與探索」(同上)

「榆林新發現一段秦漢長城遺址」、『中國文物報』一九九一年一月二十七日

彭曦「戰國秦長城考察與研究」西北大學出版社、一九九〇年

戴志尚・劉合心「榆林市境内新發現一段秦漢長城遺址」、『文博』一九九三年二期

姚双年「陝西合陽新発見戰國時期秦長城」、『考古與文物』一九九三年三期

●秦(東)魏(西)長城

張維華「魏長城考」『禹貢半月刊』第七卷第六七合期一九三七年

中國社会科学院考古研究所陝西工作隊「陝西華陰、大荔魏長城勘查記」、『考古』一九八〇年六期

史念海「黄河中游戰國及秦時諸長城遺迹の探索」、『河山集』第二集、三聯書店、一九八一年

史念海「洛河右岸戰國時期秦長城遺迹の探索」、『文物』一九八五年一、二期のち『河山集』第三集、人民出版社、一九八八年所収

王重九「関中東部秦魏諸長城遺迹の再探索」、『歷史地理』第五輯一九八七年

史念海「再論関中東部戰國時期秦魏諸長城」、『河山集』第四集、陝西師範大學出版社、一九九一年

●陝西澄城縣、黃龍県交界地戰國魏長城」、『考古』一九九一年第三期

●趙長城

張維華「趙長城考」『禹貢半月刊』第七卷第八九合期

「張家口地区古長城調查主要收穫」

蓋山林・陸思賢「陰山南麓の趙長城」、『中國長城遺迹調查報告集』

鄭紹宗「河北省戰國、秦、漢時期古長城和城障遺址」同上

沈長云「趙長城西段與秦始皇長城」、『歷史地理』第七輯、一九九〇年

劉建華「張家口地区戰國時期古城址調查發現與研究」、『文物春秋』一九九三年第四期。

●燕長城

項春松「昭烏達盟燕秦長城遺址調查報告」、『中國長城遺迹調查報告集』

鄭紹宗「河北省戰國、秦、漢時期古長城和城障遺址」同上

布尼阿林「河北省圍場縣燕秦長城調查報告」同上

●楚長城

張維華「楚方城考」、『齊大季刊』六期、一九三六年

王彥芬「楚方城考」、『楚文化研究論文集』中州書畫社、一九八三年

●齊長城

張維華「齊長城考」『禹貢半月刊』第七卷第一二三合期

●統一秦長城

寧夏回族自治区博物館・固原県文物工作站「寧夏境内戰國、秦、漢長城遺迹」、『中國長城遺迹調查報告集』

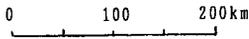
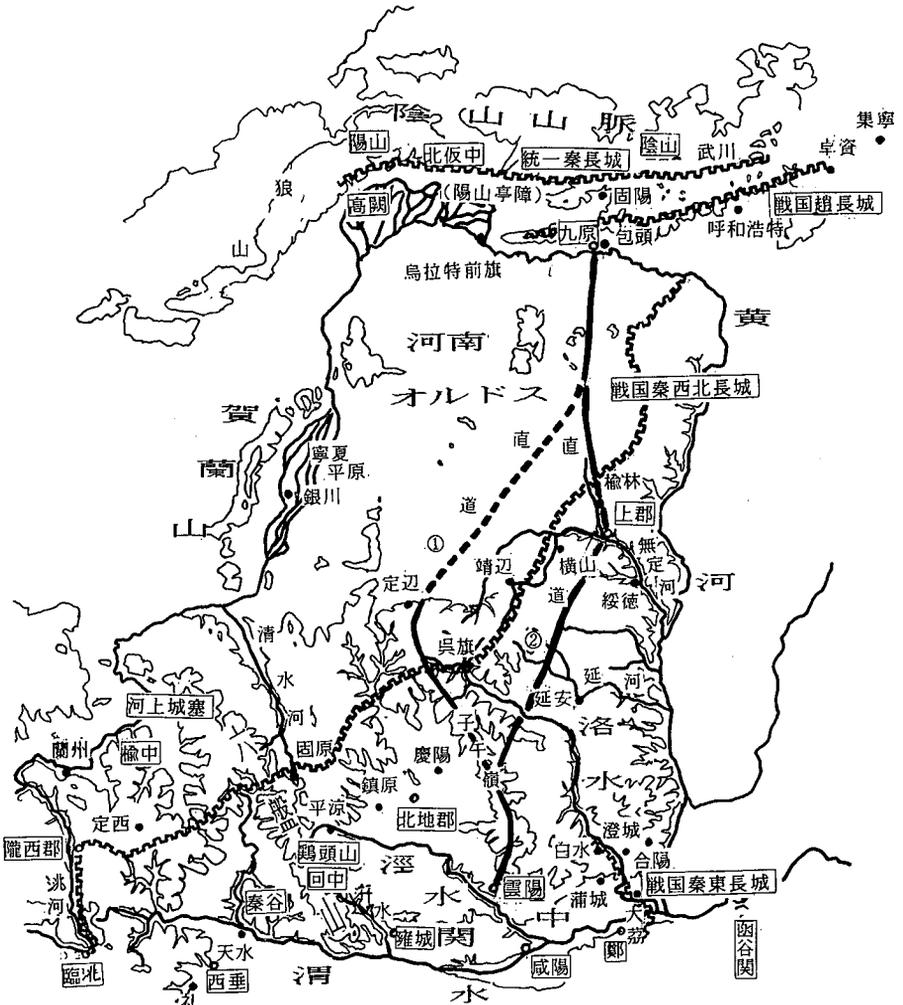
唐曉峰「内蒙古西北部秦漢長城調查記」、『文物』一九七七年五期

蓋山林・陸思賢「内蒙古境内戰國秦漢長城遺迹」、『中國考古学会第一次年會論文集』文物出版社、一九八〇年のち『内蒙古文物資料』一九八四年所収

吉登習「内蒙古的秦漢長城」、『内蒙古文物古迹散記』内蒙古出版社、一九八八年所収

陳可畏「論戰國時期秦、趙、燕北部長城」、『中國長城学会編』『長城國際學術研討論文集』吉林人民出版社、一九九五年

李文信「中國北部長城沿革考」、『遼寧省博物館學術論文集』第一輯、一九八五年



● 現在の地名 (関連遺跡所在地)

○ 歴史的地名

—— 長城

—— 直道 ① 上郡不經由ルート

② 上郡經由ルート

--- 未調査部分

図：秦長城関連地図